

絹莢豌豆の品種「せときぬさや」

および「あきどりきぬさや」

吉崎徹磨・山田 亀・船越建明

1 は し が き

広島県の島嶼部地帯は気候温暖で、無霜地帯も見られ、畑は、瘠薄な傾斜畑が多く、古くから絹莢豌豆の栽培が行なわれ主要作物となっている。栽培の型は主として春採りであるが、早生のものを用いれば夏播、秋採りも可能であり、これ等の点を考慮して品種育成に着手し、1961年「せときぬさや」を、又1962年「あきどりきぬさや」を育成した。「せときぬさや」は春採種で良質、多収が特長であり、「あきどりきぬさや」は不時栽培専用種で極早生、多収が特長である。



「せときぬさや」の生育状況



「あきどりきぬさや」の生育状況

2 せときぬさや

1) 育成経過

本県の島嶼部地帯で古くから栽培されている絹莢豌豆は、東部の諸島では白花矮性種が多く、西部の諸島では赤花矮性種が多いが、使われている系統はいずれも雑ばくで、これが品種の統一、栽培法の改善のため1953年に現地から栽培種を集め、純系分離による品種育成に着手した。これ等栽培種の中からS系統（重井産）39、T系統（立花産）14、M系統（立花以外の向島産）16、OR系統（沖美産赤花）15、SR系統（重井産赤花）19を分離し、1956年迄は毎年特性調査を行なった。過去4ケ年の特性調査で特に早生、草勢強、伸長良好、結莢性良好、品質良好、耐寒性のあること等を主目標として9系統を選抜した。うちわけはS系統4、T系統2、OR系統1、M系統2であった。これ等の系統について1957年より4年間生産力検定を行なった結果系統名「T-5」を優良系統として選抜し、1961年に「せときぬさや」と命名した。

第1表 育成経過一覧

項 目	年 度							
	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960
栽 植 系 統 数	104	104	72	66	9	3	3	3
選 抜 系 統 数	104	72	66	9	3	3	3	3

2) 特 性

(1) 形態的特性

草型は矮性匍性であるが、やや大型である。分枝は中程度で整枝に適し、葉はやや大きく巻ひげは少ない。葉色は緑で花色は白、若莢は白花矮性種の中では大型、淡緑色で品質は良い。種子は大粒で色は黄白、斑点はなく目の色は黄白である。

第2表 特性調査

品 種 名	調査項目 草型	葉の 大小	巻ひげ 多 少	葉 色	花 色	草 丈 (cm)	種 子			
							粒の 大小	皮 色	斑 点 有 無	目 の 色
せときぬさや 矮性蔓無白花(比)	匍 立	大 大	少 多	緑 淡緑	白 白	76.0 110.7	大 小	黄白 黄白	ム ム	黄白 黄白

(2) 生態的特性

白花矮性種の中では中生に属し耐寒性は中位、耐病性は矮性白花種の中では強い方である。耐肥性は中位であるが窒素過多の栽培には不適である。多収品種である。

第3表 生育調査

品 種 名	調査項目 発芽始 (月日)	発芽期 (月日)	発芽揃 (月日)	開花始 (月日)	開花期 (月日)	開花揃 (月日)	結莢期 (月日)
せときぬさや	10.24	10.26	10.28	2.12	2.16	2.23	3.10
矮性蔓無白花(比)	10.25	10.26	10.27	2.20	2.26	3.1	3.17

(注)：播種=10月17日

第4表 収穫物調査

品 種 名	調 査 項 目 収 穫 月 日	若 莢 重 (kg/a)				比較比率 (%)
		上 物	中 物	下 物	計	
せときぬさや	4.10 以前	2.8	2.3	0.9	6.0	
	4.11~4.20	5.6	5.2	1.8	12.6	
	4.21~4.30	13.2	12.7	2.7	28.6	
	5.1 以後	14.1	20.1	8.4	42.6	
	計	35.7	40.3	13.8	89.8	
矮性蔓無白花(比)	4.10 以前	0.5	0.8	0.2	1.5	
	4.11~4.20	2.2	2.5	0.9	5.6	
	4.21~4.30	7.0	9.8	3.2	20.0	
	5.1 以後	13.0	25.0	11.5	49.5	
	計	22.7	38.1	15.8	76.6	

3) 適地および栽培上の注意

瀬戸内海島嶼部および沿岸部に適す。冬期間はあまり伸長しないが、気温の上昇に伴い急速に伸長する。草型がやや大型であるため、畦巾はやや広くとる必要がある。施肥量は普通で特に窒素はやりすぎないようにする。

4) 育成従事者

年次	育成従事者
1953	吉崎 徹 磨 山田 亀
1954	" "
1955	" "
1956	" "
1957	" "
1958	" "
1959	吉崎 徹 磨 船越 建 明
1960	" "

3 あきどりきぬさや

1) 育成経過

1950年に県農試可部園芸支場で、広島赤花を母とし、立花豌豆を父として人工交配を行なった中の1系統である。両親の特性を概説すると広島赤花は中生種に属する蔓性の赤花で、莢は中型、緑色を呈する。一方の立花豌豆は広島県御調郡向島町立花地方在来の早生種に属する矮性白花で、莢はやや大型、緑色を呈する。1953年(雑種第3代)以後は県農試島嶼部支場で試験を受継ぎ、選抜を重ね固定したもので、1957年に特性調査の結果優良と認め、33D-10の系統名を附し、春採栽培で生産力検定を続けた。この作型では極早生の特性が十分に利用され得なかったが1960年に秋採栽培を行なったところ極めて適していることがわかり、1961年の生産力検定の成績をもって「あきどりきぬさや」と命名した。

第6表 育成経過一覧

世代	F ₃	F ₄	F ₅	F ₆	F ₇	F ₈	F ₉	F ₁₀	F ₁₁
年度	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961
栽植系統数	36	35	28	25	6	5	2	2	1
選抜系統数	35	28	26	6	5	2	2	1	1

4) 特性

(1) 形態的特性

草型は矮性立性であり大きくならない。葉はやや小さく巻ひげは多いほうである。葉色は濃緑、花色は紫紅、若莢は緑色でやや小型、長味を帯びて品質は良い。種子は小さく緑褐色を呈し、しわがあり斑点はなく、目の色は淡褐色である。

第7表 特性調査

品種名	調査項目	草型	葉の大小	巻ひげ 多 少	葉 色	花 色	種 子			
							粒の大小	皮 色	斑点有△	目の色
あきどりきぬさや		稍立	小	多	濃緑	紫紅	小	緑褐	無	淡褐
富戸赤花(比)		稍立	中	中	濃緑	紫紅	小	緑褐	無	淡褐

(2) 生態的特性

極早生である。暖地の抑制栽培においては播種後約2カ月で収穫出来る。耐暑性は強く、耐病性は中位である。抑制栽培において極めて多収である。

第8表 生育調査

品種名	調査項目	発芽始 (月日)	発芽期 (月日)	発芽揃 (月日)	開花始 (月日)	開花期 (月日)	開花揃 (月日)
あきどりきぬさや		8.20	8.22	8.24	9.30	10.5	10.8
富戸赤花(比)		8.19	8.22	8.25	10.21	11.10	11.15

(注)：播種=8月14日

第9表 収穫物調査

品種名	調査項目 収穫月日	若 莢 重 (kg/a)			比較比率 (%)
		上 物	屑 物	計	
あきどりきぬさや	10.1~10.31	3.1	0.5	3.6	
	11.1~11.30	19.5	1.1	20.6	
	12.1~12.31	16.2	1.7	17.9	
	1.1以降	1.9	0.8	2.7	
	計	40.7	4.1	44.8	
富戸赤花(比)	10.1~10.31	0	0	0	
	11.1~11.30	1.9	0.4	2.3	
	12.1~12.31	4.9	0.9	5.8	
	1.1以降	1.0	0.6	1.6	
	計	7.8	1.9	9.7	

3) 適地および栽培上の注意

不時栽培用品種であるため適地は広いが、瀬戸内海島嶼部および沿岸部の秋採栽培にもつとも適する。この場合播種期が高温、乾燥期となるため、発芽を促すような管理が必要である。種子の低温処理は必要ない。高温時の栽培では分枝が少ないため、初期収量をあげるためには密植栽培を行なうが良い。又病虫害の発生が多いため充分な管理が必要である。

2) 育成従事者

第10表 育成従事者

年次	育成従事者
1950	横田 忠夫 高木 俊夫
1951	" "
1952	" "
1953	吉崎 徹磨 山田 亀
1954	" "
1955	" "
1956	" "
1957	" "
1958	" "
1959	吉崎 徹磨 船越 建明
1960	" "
1961	" "

4 摘 要

瀬戸内海島嶼部地帯に適する矮性絹莢豌豆の品種を育成するため、交配および純系分離により育種を行ない「せときぬさや」および「あきどりきぬさや」を育成した。両品種の特性概要は次の通りである。

せときぬさや

- 1 春採種で草型は矮性匍性，花色は白，若莢は白花矮性系統の中では大型，淡緑色で品質は良く多収である。
- 2 中性に属し耐寒性は中位である。窒素過多の栽培には不適である。
- 3 白花系統は一般に病気に弱いため早期の薬剤散布が必要である。

あきどりきぬさや

- 1 不時栽培専用種で草型は矮性立性，花色は紫紅，若莢は緑色でやや小型，品質は良い。
- 2 極早生で耐暑性は強く，暖地の秋採に特に有利である。
- 3 播種期が高温，乾燥期となるため，発芽を促すような管理が必要である。高温時の栽培では分枝が少ないため初期収量をあげるためには密植栽培を行なうが良い。

Summary

On Breeding of "Setokinusaya" and "Akidorikinusaya" New Varieties
of Garden Pea (*Pisum sativum* L.)

Tetsuma YOSHIKAWA, Hisashi YAMADA and Tatsuaki HUNAKOSHI

New varieties of garden pea, "Setokinusaya" and "Akidorikinusaya" were bred up by pure line selection and crossing. The main characters of these varieties are as follows.

Setokinusaya

1. This variety is fit for the spring cultivation. Plant type is dwarf and cleepy, and the flower is white in colour. The young legume is larger than those of other dwarf-white-flower varieties, slightly green in its colour, and high qualitative.
2. This variety is middle ripening and has middle cold resistance. It is not fit for the cultivation under heavy nitrogen condition.
3. Generally the white flower group has slight disease resistance, so it is necessary to control them early with the application of effective fungicides.

Akidorikinusaya

1. This variety is cultivable out of season. plant type is dwarf and standing, colour of flower is pink violet. Young regume is small, green coloured, slightly long and high qualitative.
2. This variety is very early ripening and has strong hot tolerance, so the autumn cultivation in warm district is profitable.
3. At autumn cultivation, as the seedtime is in dry and high temperature condition, we must take great pains for germination. On cultivation of high temperature condition the branches spring few, so it is necessary to seed thickly for high yields in early part of harvest.